空間・社会・地理思想 6号 113-129頁, 2001年
Space, Society and Geographical Thought

ポストモダンの地政学？

—近代地政学的想像力とその克服—

ガローグ・オトゥーホール*
（實　一穂** 訳）

Gearóid Ó Tuathail
Postmodern geopolitics?
: The modern geopolitical imagination and beyond
In Gearóid Ó TUATHAIL & Simon DALBY eds., *Re-thinking geopolitics*,
© Routledge, 1998, London, pp.16-38

グローカリゼーションは地政学を内部から崩壊させることができそうだ。

Luke (1994: 626)

我々のポストモダンの時代に適した表象様式に対する挑戦とは、…主権の問題構制を超えて動く必要性に適った世界政治の理解を、地政学的断片や固定的な主題や経済的な権力に焦点を当てることと接合することである。もっとも、これらに焦点を当てることは、フロー、ネットワーク、ウェブやその中に位置するアイデンティティの形成を重要視するが、別の分析レベルや情況に対してより多くの主体を加えることに単に訴えるものではない。

Campbell (1996: 19)

昔も今も、ある程度の混乱といったものは、人間社会の最も一般的な特徴なのかもしれない。

Mann (1996: 1964)

我々は、複雑で混乱した時間と、地球的規模の流動が交差し、情報技術の強さと速さによって歪められた空間の中に住んでいる。我々がそれを後期モダニティと呼ぶにせよ、ポストモダニティと呼ぶにせよ、それは、「この世界はどのように作用するのか」に関して、我々が受け継いできた存在論と固定してきた想像力とを、不公平だがまぎれもなく蝕んでいる条件なのである。我々にとって便利でありふれた地政学的想像力は、空間的ブロック、領域的存在、固定されたアイデンティティによって世界を可視化し、地図化するのであるが、それは、空間が速度により置き去りにされ、領域性が遠隔測定法によって蝕まれ、単純で固定的なアイデンティティが複雑で不安定な混合性のネットワークの中にかすんでいるような世界においてはもはや適切ではない。ポストモダンという条件は近代地政学的な地図を問題化し不安定化するように見える。すなわち、そうした地図の色あせた可能性の条件、ありふれた地理的レトリック、伝統的な領域的対象や存在論的な純粋性をかき乱すのである。その結果、ポストモダニティは我々に新しい地政学をもたらすのだろうか？

新しいミレニアムを目前にして、「地政学」のような知の体系を深く再考する必要があるのは、日常のグローバルな実践とネットワークの結果、我々が知っているような地政学に異議が唱えられているためである。つまり、20世紀後半においては、経済のグローバル化、グローバルなメディアの流れ、インターネット、国境を超える犯罪網、ハイパーリアルな情報領域が絶えず国政の実践を左右しているのである。本章は、世界政

* バージニア州立大学
**九州大学・院

治を支える空間の表象や空間的実践を示すものとしての地政学の歴史的な過去、混乱する現在、推論的な未来に関して、ジョン・アグニューJohn Agnew、ティモシー・ルーク Timothy Luke その他の研究者による理論的な図式（スキーマ）と批判的な対話を行うことによって、地政学を再考しようとするものである。アグニュー(1998: 6) は、「近代世界政治の歴史は、近代地政学的想像力の要素をともに構成する『世界が作用する様式』に関する一連の理解に基づいた実践によって構成されてきた。」と述べる。この近代地政学的想像力は 16 世紀のヨーロッパに起源をもち、それ以来世界政治を構成し条件付けてきた。国際経済の性質が変わるにつれて、支配的な世界大国間の勢力均衡も時代とともに変わっていくけれども、アグニューは、近代地政学的想像力は「世界政治を行う枠組みにおいてなお有力である」(1998: 6 訳注 1))と主張する。にもかかわらず、アグニュー自身(1998)もルークも他の研究者もこうした観察を疑問視する今日的な状況について記述している。

最初にアグニューによる近代地政学的想像力の研究を概説することで、本章では、近代地政学的想像力を混乱させてはいるが（この点については結論で述べたい）完全に超越してはいないポストモダン地政学の概要を示すために、ルーク(1994, 1995, 1996)や他の学者の推論的な研究を用いて、アグニューによる近代地政学のカテゴリー化を補完したい。ここで扱う研究と同様に、本章は必然的に、歴史的には包括的であり、理論的には推論的である。そして、現在の地政学的局面を説明し理解するために使われてきた、歴史的図式と観念的構成物を再検討するとともに明確化する。発見のための抽象化や観念的なタイプとしては、これらの図式と分類は完全とはいえない。こうした図式と分類は地政学的な言説と実践のもつ厄介な歴史性と複雑な空間性とを平易なものにし、それに深い論理を与えるとともに一貫性を強調する。もっとも、こうした言説と実践にそのような深い論理と一貫性とが必ずしも伴うわけではないのだが。にもかかわらず、これらの図式が発見的で教育的な価値を有しているのは明らかで、地政学の難解な歴史、混乱した現在、起こりうる未来の形式を刺激的に明快にするだけでなく、疑いなく簡単にする。近代地政学とポストモダン地政学の対比は、不必要で誤解をまねく二分論法につながるが、にもかかわらず、批判地政学には、21 世紀を目前にして地政学的実践の表象様式と条件とがどのように変化しているのかを理論化する義務がある。別稿で述べたように、地政学は、混乱した特異なコンテクストにおいて最もよく研究できる(Ó Tuathail 1996)。そうした特異なコンテクストに携わることは、地政学の今日的様式と実践において誘発されているポストモダニティの条件と多様な変形の推論的な理論化を必要とする。

近代地政学

「地政学」という言葉は 19 世紀後半に起源をもつが、20 世紀後半になると世界政治の空間性を意味するものとして広く使われるようになった。アグニューは、彼自身の著書とスチュアート・コーブリッジ Stuart Corbridge との共著において、この概念に何らかの正確さと特異性を与えようとし、最近の近代地政学に関する、おそらく最も包括的な歴史的および唯物論的理論を提示した(Agnew and Corbridge 1995; Agnew 1998)。イタリアの共産主義者アントニオ・グラムシ Antonio Gramsci のマルクス主義的ポリティカルエコノミーと、フランスの哲学者アンリ・ルフェーブル Henri Lefebvre の空間に関する独特の記述を限定的な反テキスト主義的批判地政学と混ぜ合わせて、アグニューは一般的な地政学理論を提示した。それは、実践と理論として、唯物論的世界秩序として、言説的な理解と規則の枠付けとして地政学を扱うものだった。その結果が、アグニューとコーブリッジの両者がかつて「地政学的経済学（ジオポリティカル・エコノミー）」と呼んだもので、地政学とポリティカルエコノミーとの混合物だった(Agnew and Corbridge 1989) 1)。

アグニューとコーブリッジは、ルフェーブルが言う空間的実践と空間の表象とを区別する(Lefebvre 1991:38-39) 2)。彼らにとって空間的実践とは、「経済的生産と社会的再生産の基本的な特徴として空間においてそして空間を横切って生じる物質的、物理的な流動、相互作用や移動に関連する(Agnew and Corbridge 1995: 7)」。空間的実践は空間を横切る日常の物質的な実践で、政治経済の世界的な秩序を強化するのに役立つ。空間の表象は、「空間的実践について話し理解するために使われる、概念、命名行為、地理的コードのすべてを含む」。空間的実践が、暗黙のうちに言説以前の物質性を想定しているのに対して、空間の表象とはイ

デオロギーであり言説である。もちろん、この図式には、長年にわたって立証されずにきたマルクス主義者による実践と言説との区別という問題がつきまとっている。このことに気付いていながらも依拠することによって、アグニューとコーブリッジは、このように繰り返される区分を取り扱う手段として、諸カテゴリー間の「弁証法的関係」を強調する。

こうした区分を構築することで、アグニューとコーブリッジは地政学的秩序と地政学的言説とを決定的に区別する。すなわち、前者が空間的実践という世界規模の政治経済であり、後者が空間の表象という固定的で覇権的（ヘゲモニック）な構成である。彼らの言うヘゲモニーとはグラムシから導き出され、ロバート・コックス Robert Cox(1987)の研究により補強されたもので、世界政治におけるアクターを巻き込み、条件付ける規則や規制全体を強調する。彼らは地政学的秩序について、以下のように述べる。

> 我々が用いる「秩序」は慣例化された規則、制度、活動や戦略に関連があり、それらによって国際政治経済がさまざまな歴史時代において作用するのである。「地政学的」と修飾された語句は世界秩序の地理的要素に注意を引く…。秩序は必然的に地理的特質を有する。これらは、社会・経済活動に対する国家領域の求心性の相対的強さ、諸国家の階層性の性質（1つまたは複数の国家による支配、国家の対等性の程度）、さまざまな国家と国際的な組織やビジネスのような他のアクターによる活動の空間的範囲、多様なアクター間の空間的結合性と非結合性、情報・軍事技術が空間的相互作用に与える条件付けの効果、軍事・経済的「安全保障」に対する脅威という観点からの支配的国家による世界の地域や特定の国家のランク付けといったことを含む。
>
> (Agnew and Corbridge 1995: 15)

「領域国家の社会」の歴史的出現とナポレオン戦争以後の「パワーポリティクス」に関する近代的ルールを強調することで、アグニューとコーブリッジは3つの異なる地政学的秩序を明記した。それはイギリスの地政学的秩序（1815 - 1875）、帝国主義間の対抗という地政学的秩序（1875 - 1945）と、冷戦の地政学的秩序（1945 - 1990）である（表 1）。歴史的時期、地政学的秩序や、覇権の条件において、アグニューとコーブリッジの図式の中に一定のずれがある。それは、私が他で論じたように、覇権の条件が存在するのか存在しないのかを議論する場合の、グラムシ的なヘゲモニー概念の不正確さという機能である（Ó Tuathail 1995）。彼らは「地政学的秩序は常に不完全であり、不安定なものである（p.19）」と述べている。しかし、それにもかかわらず、自らの地政学的秩序のことを、永続的で、個別的で、時代を確認しうるものとしてはっきりと述べている。彼らは、覇権国（支配的な国家）が存在しない地政学的秩序を認めながらも、覇権の条件が存在しない地政学的秩序を考えていない。地政学的秩序は覇権なのである。覇権的でない地政学的秩序は可能性として認められない。現在のポスト冷戦の時代は支配的な覇権国家が存在しない覇権として評される。換言すれば、ドイツや日本、アメリカといった強力な国家によって支配され、世界規模の市場によって統合され、EU（ヨーロッパ連合）、WTO（世界貿易機関）、IMF（国際通貨基金）やWB（世界銀行）のようなトランスナショナルな機関や組織により規定されるような地政学的秩序なのである（Agnew and Corbridge 1995: 193）。この時代の覇権的なイデオロギーは、トランスナショナルなリベラリズムであり、その信条は、地球横断的な資本主義市場の拡大と拡張に普遍的な進歩があるというものである。

表1 近代地政学（Agnew 1998; Agnew and Corbridge から）

空間的実践		空間の表象
地政学的秩序		地政学的言説
イギリスの地政学的秩序	1815-1875	文明的地政学
帝国主義間の競争	1875-1945	自然化された地政学
冷戦の地政学的秩序	1945-1990	イデオロギー的地政学
トランスナショナルリベラリズム	1991- ？	拡大の地政学

アグニューとコーブリッジにとって、地政学的言説は、それによって、公式の理論家と実務者から成る国政の識者が世界政治を空間化するような言説である。それは、国際政治経済を取り巻く地理の解釈や記述に関連している。それは「空間的実践を地政学的秩序の中心へと導く、空間の表象の展開」に関わる(同書: 47)。テキスト主義者のアプローチという理想主義やイデオロギーとしての地政学という決定論と機能主義として彼らが理解するものを拒否することで、彼らは思考と実践との間の偶発的な関係を強調する。つまり、「表象の様式は暗黙的に実践の中にあるが、実践が変化するにつれ修正される。空間的実践と空間の表象は弁証法

的に織り成されている。言いかえれば、表象が物質的生活の空間的輪郭によって形作られるのと同様に確かなかたちで、物質的生活の空間的条件もその表象を通じて形作られるのである(同書: 47)」。

ちょうど空間的実践の一定の組織が覇権的地政学的秩序になるように、地政学的表象の一定の支配様式もまた覇権的な地政学的言説、すなわち、それは、人々がどう生き、考え、世界がどう動くかについてどのように想像するかを示す、認識的な強制者となる。覇権のすべての条件と同様に、地政学的言説という覇権的秩序が、流動的で、偶発的で挑戦に反応して永続的に変化していることを認めながらも、彼らは、地政学的表象の 3 つの相対的に安定した歴史包括的な様式を認める。こうした様式は、すでに触れたような三つの地政学的秩序に対応している。すなわち、文明的地政学(1815－1875)、自然化された地政学(1875－1945)、イデオロギー的地政学(1945－1990)である(表 1 参照)。アグニューとコーブリッジはそれについて明言はしていないものの、いわゆる(多くの種類の矛盾や緊張によって深く引き裂かれた疑わしい構成概念である)「市場民主主義」というコミュニティを拡大させるというクリントン Clinton 政権の戦略以後、現時点における支配的な空間の表象は拡大の地政学と呼ぶことができよう(Ó Tuathail and Luke 1994)。いずれの場合にも、「政治的エリートの実践的な地政学論は、支配的な空間の表象と支配的な空間的実践という地政学的秩序との結合である(Agnew and Corbridge 1995: 48)。」

これらすべての地政学的表象の歴史的、覇権的な様式を枠付け、条件付けることは、「近代地政学的言説」を定義する、より抽象的で包括的なマクロ歴史的な原理である。『空間の支配 *Mastering Space*』では、近代地政学的言説の始まりが「発見の時代」におけるヨーロッパ人とヨーロッパ人でない他者との出会いまで辿られている。それ以前の帝国や長く培われてきた社会秩序にも「他者性」という概念が存在したものの、アグニューとコーブリッジは、「近代地政学的言説の特異な性質」は、「もし他者がそのまま残っているのであれば、『時代遅れ』ないしは永久に不利な立場としての他者」(同書: 49)の表象であると主張する。ヨーロッパの他者は常にヨーロッパより劣った状態に固定されてきた。彼らはヨーロッパの過去として、ヨーロッパ文明を定義した外部の野蛮性と未開性として表象された。地理的な差異は時代遅れと最新という時間的な図式へと読み替えられた。それゆえ、ヨーロッパ以外に旅行することは過去へと旅行することであり、人類文明の発展におけるより初期の時代遅れの段階へと旅行することであった(Doty 1996; Gregory 1994; Grovogui 1996)。

このように重要な近代地政学のものの見方に関する考えはアグニューの『地政学－世界政治の見直し－ *Geopolitics: Re-Visioning World Politics*』(1998)でさらに展開されている。その研究の中で、アグニューは、ルネッサンスを起源とする「近代地政学的想像力」のメタ－理論的特徴を同定する。彼は前述の「特異な性質」を強調し続けているものの、近代地政学的想像力の新しい「根本的な特徴」もしくは「最も顕著な特徴」は、世界政治がそれなくして不可能であったであろう「グローバルな視覚化」である、と主張する。ヨーロッパで 16 世紀以降グローバルな視覚化という哲学と地図製作の技術が発展したことが、近代地政学を可能にした。そうした発展が不完全ではあるけれどもまとまった全体として世界を想像することを可能としたからである。遠近法という技術的な発明が一眼的な視点から、1 枚の絵画としての世界という考察を可能にした。こうした単眼的まなざしはデカルト哲学によって世界の客観性という特徴を与えられた。統一された同質的な全体として世界を客観的に見るという視点は、ヨーロッパ人による場所の水平的な階層という区別につながった。古代の二元的な地理と階層が再利用され、地球は固定的で実在論的な空間という広大な包みとして区別された [3]。局地的な差異は、普遍的でグローバルな脅威へと地図的に精製され解釈された。

アグニューによる近代地政学的想像力の第 2 の特徴は以前の主張が繰り返されているもので、時間は空間に変わるということである。空間のブロックは分離されるとともに、「ひとつのブロックの理想化された歴史的経験に関して、異なる時期の本質的な属性によって分類される(1998: 第 2 章)」。この「近代的」を表象する空間的様式はルネッサンス以来絶えず地政学の一部分となってきた二元的な地理を生み出した。すなわち、先進性と後進性、近代的と伝統的、西と東、西洋と東洋である。それぞれの覇権的地政学的秩序は、こうした語句に独特な意味と価値を与える。テイラー

Taylor(1996)によれば、覇権的国家は、現代の政治、経済、文化や普段の日常の楽しみという覇権的なヴィジョンを作るモダニティの実験室である。それらは、その時代の理想化されたヴィジョン－17 世紀のアムステルダム、19 世紀のマンチェスターもしくは 20 世紀半ばのロサンジェルス－を、残りの世界に対してその将来であるかのように投影する。この実践は、覇権国の通常のモダニティに関してモダニティや進歩や発展のそれぞれの程度によって定義された空間の階層へと、世界の地理を自民族中心的に構成しがちである。地球を 3 世界に区分した冷戦的区分やウォルト・ロストウ Walt Rostow の経済成長の諸段階に関する発展としての近代化理論は、こうした近代地政学的想像力という長年にわたる特徴の、最近の表明にすぎなかった。

近代地政学的想像力の第 3 の特徴は、国家中心的なグローバル空間の表象で、アグニュー(1994)はこれを「領域的罠」と呼んだ。こうした国家中心的な世界政治へのアプローチは、何世紀にもわたって実践的および形式的地政学論において発展した。アグニューによれば、それは 3 つの地政学的仮定によって支えられている。すなわち、「（1）諸国家は主権概念によって表明されるような領域内における排他的な権力を有する。（2）『国内』事情と『国外』事情は本質的に切り離された領域で、それぞれ異なる規則が適用される。（3）国家の境界線が社会の境界線を定義する。それゆえ後者は前者によって『包容』される(1998:第 3 章 51 訳注2))。」である。これらの仮定はいずれも歴史的に疑わしくそして不明瞭である。それでもなお、これらの仮定は、日常的な国策の実践において機能し、世界政治に、地政学的分裂性と領域的に定義された境界とアイデンティティの集合とを与えるのである(Murphy 1996)。こうした内部的に主張された in-stated 空間のアイデンティティや想像力は、多くの場合不安定であり競合するものの、それらは国家の諸制度、国際組織や日常の社会的実践の複合体によって強化される。地政学は与えられるのでなく作られるものである。

アグニューが区別した近代地政学的想像力の第 4 の構成要素は、インターステートシステム内での支配的国家による首位性の探求である。主権は名ばかりに同等な存在であるにすぎず、近代インターステートシステム内の国家は、実際にはそれぞれの地理的場所、領域的範囲、天然資源の保有、社会的な組織、政治的指導性や国力の潜在力において根本的な違いがある。これらの差異は国家間の相対的な権力闘争という文脈のなかで、地政学者によって久しく分類され概念化されてきた。支配的国家による首位性の探求は、ローカル、リージョナル、グローバルのスケールにおいていくつかの言説を生み出した。それらは、限りある資源に対して無秩序という条件のもとで、地球における潜在的な国力の不均等な分布と国家間の競争という不変の「法則」の当然の結果として、国家ミリタリズム、領土拡張主義、海外帝国主義や戦争を説明するとともに正統化しようとしてきたのである。19 世紀後半から 20 世紀を通じて、パワーポリティクスという「現実主義」の言葉は、地理学や生物学のような新興の近代的学問分野のいわゆる「科学的な」言葉と融合した結果、原始的な「自然状態」にみられる文明的、人種的、国家主義的な階層の多様な秩序を位置づけ説明する社会ダーウィニズム的色彩の強い地政学的言説と実践を作り出したのである。地政学的仮定とは、まず、「国力は地理的位置、人口規模、天然資源といった優位性から生じる」ものであり、次いで「国力はもっぱら、他の国家との競争の中でそうした力を独占しようとする領域国家の特性である」というものである。アグニュー(第 4 章)が適切に述べているように、こうした地政学的仮定はもはや妥当ではなく、それらの冗長性は、近代地政学的想像力の限界と歴史的偶発性の証拠である。

このように特徴づけられる地政学は、グローバル空間を表象する特別な様式として描くことができる。1 枚の絵画としての世界を生産するグローバルな視覚化という実践は、自明のデカルト的遠近法、すなわち、どこにもない所からの仮定的な見方で、実際には、グローバル空間の客観的な解釈としてヨーロッパより一般的には西洋からの特別な見方を歴史的に表現するという見方に依拠している。グローバルな空間を本質主義的なブロックへと階層的に構成することは、思考中心主義という西洋の伝統、すなわち、科学、歴史や自然の基礎をなす真理をアピールすることで偶発性を統制しようとする伝統に深く依存している。領域的幾何学と空間的二分化によってグローバル空間のダイナミックな動きを封じ込めることにより、境界、分割、フロンティアを可能にする現存の形而上学は流動化される。

近代地政学が哲学的に傾倒したり思い上がったりす

るという秩序に基づくものであることを明らかにすることは、地政学を言説として絶対視することではない(Agnew 1998 とは逆)。地政学は国家の哲学であり、統治－心理の技術である。それは、大国の帝国主義的資本の中で、それらの学問体系の中で、野心的な拡張主義国家の地図室や作戦室の中で想像され、はぐくまれた。偏狭な帝国主義者のまなざしは水平線の彼方の土地を運命の空間として表象し、コミュニケーションネットワーク、戦争の兵站学、自民族中心的な領域構成モデルによって世界を植民地化するのに役立つ(Mattelart 1996 訳注3)。近代地政学的想像力とは、16世紀以来、ヨーロッパがその領域的な形式を世界に押し付けてきた遺産であり、主権的な存在とそれに内在する理法をめぐる、無数の空間－内部や外部、山や谷、陸や海－を統制しようとしてきた、地球に関する権力の秩序である。グローバル空間は、本質的な実在（と不在）によって特徴づけられ、自然な地域や階層へ組織され、その固有の意義や価値のため分類され、そして神の威信という運命付けられた性質として特徴づけられる。

とはいえ、この地－権力の秩序とその認識論的な帝国主義は、空間を組織し地を記述するというもう一つの隷属的な形式からの挑戦なくしては進行しなかった(Gregory 1994)。ここ2,30年のうちに、グローバリゼーションによって世界政治地図の相互連結性や機能的な境界が再調整されてくるにつれて、近代地政学的計画は以前よりもいっそう不確かになってきたように思われる(Luke 1996b)。今日、「グローバルな生活」という日々の実践が領域的な限界からはずれ、近代的な地図を越えて促進され、「地政学の終焉」の宣言が刺激されるにつれて、近代地政学的計画のほころびがだんだん明らかになっている(Ó Tuathail 1997a)。近代的地図のほつれた線や縁、未だ名ばかりの近代世界政治内におけるポストモダンの侵入へと、我々は向きを変えねばならないのだ。

ポストモダン地政学

近年、一連の別々ではあるが関連した傾向が、現代世界政治における「近代性の終焉」に関する多くの考察を生み出すのに役立ってきた。第1の傾向は、世界政治におけるアメリカの覇権の長期間にわたる相対的な後退である。それは、固定為替相場というブレトンウッズ体制の終焉、1970年代の石油危機、アメリカのベトナムからの撤兵と事実上の敗北といった多くの象徴的な転換点を経てきた、避けられない過程であった(Cox 1987)。第2の傾向は、共に作用し、やはり長期間にわたって相対的に強まっている経済のグローバル化である。この現象は決して新しいものではないが、ここ10年のうちに、きわめて国家主義的な国際政治経済から脱領域化されたグローバル経済へと大きな構造的な変化となって現れてきた(Kofman and Young 1996, Mittelman 1996)[4]。さらに、避けられず止めることのできない「グローバリゼーション」の象徴として、多くの過程と出来事が解釈される。それは、グローバル金融空間の出現、柔軟で専門化された生産手段の幅広い採用、アメリカにおけるトランスナショナルな投資の爆発、NAFTA（北米自由貿易協定）の発足、アメリカの日本および現在は中国に対する貿易赤字の増大である(Harvey 1996; Greider 1997; Leyshon 1996)。第3の傾向はしばしば述べられる「革命的変化」と関連するもので、社会、経済、政治の隙間のいたるところでの新しい情報技術の確立、採用、普及によって作用する。具体的には、ファクシミリ、衛星技術、パソコン、ケーブルテレビ、そして近年におけるコンピューター・ネットワーク、ワイヤレスコミュニケーションやインターネットである(Tapscott 1996)。マクルーハン McLuhan の「メディアはメッセージである」という有名な宣言と相応して、多くの理論家は、それをかなり正当化しつつ、これらの技術がグローバル空間を横切って展開しその過程によって自らを変形させるにつれて、それらがさまざまなアクター、社会、経済、政治組織の紐帯や境界そして主観性を急速に作りなおしてきたと主張する(Poster 1995; Morley and Robins 1995)。三つの傾向は、いずれも他の事柄－国境を越えた輸送や集団旅行がますます容易に行えるようになったこと、国境を越えたメディア帝国の合併、引き続く国境を越えた人口移動－と組み合わさって、広く行きわたった第4の傾向を生み出した。すなわち、その名目的な領域的起源からの社会の分離や、伝統的なスケール概念の縮小と崩壊、流動的な「グローバルな生活」という経験の出現である(Appadurai 1996)。もはや伝統的な核心が保たれていない世界において、時－空間の圧縮という技術は現代のスケールと互いに

ぶつかり、多くの人々によって「グローカリゼーション」と名付けられたポストモダン的なローカルとグローバルの融合を生み出している (Agnew and Corbridge 1995: 188-207; Robertson 1995)。

ルーク(1994: 626)が主張したように、グローカリゼーションは地政学を内部から崩壊させるのだろうか？この疑問を探求する1つの手段は、ポストモダニティという条件においてグローバル空間を想像する新たな形式、すなわち、キャンベル Campbell(1996)や他の学者がフロー、ネットワークやウェブと同一視する新しい表象の様式の出現を確証することである (Appadurai 1996; Castells 1989; Shapiro and Alker 1996)。国境を越えた交易の流れがかつては分離していた国民経済を蝕んでいることを説明することにより、ロバート・ライヒ Robert Reich (1991)は今日の時代に出現する経済的幾何学として「グローバルウェブ」を認めた。かつて中央集権化されていた企業がグローバルに展開するウェブのような組織へと自らを再構成するにつれて、企業の国籍は益々不適切になりつつある。権力や富は、問題解決、問題確認、戦略的斡旋において最も価値のある技術をもつこれらのグループへ流れる。「テレコミュニケーションや輸送における効率化を通じて世界が縮小するにつれて、ある国家内のそのようなグループは、ほとんどあらゆる所にいる取引相手に最大の価値を提供するために、その技術を他国の人々の技術と結びつけることができる(同書: 111)。」現在の情報技術は、この新しい権力の幾何学にとって重要である。「グローバルウェブの縫い糸はコンピューター、ファクシミリ、衛星、高感度モニターやモデムであり、それらのすべてが、世界中の設計者、技術者、契約者、認可業者、卸売業者と繋がっている(同書: 111)。」

マニュエル・カステル Manuel Castells(1996)はさらに議論を進めて、情報時代の支配的な機能や過程が新しいネットワーク社会を導いていることを示している。ネットワークはこれまでにも長く存在してきたけれども、「新しい情報技術のパラダイムは、社会構造全体の全面的な拡大のための物質的基礎を提供するのである。」彼が主張するネットワークは、「我々の社会の新しい社会形態を構成する。そしてネットワーク化の論理の普及は、生産、経験、権力、文化の諸過程の作用と結果とを実質的に変化させる(1996: 496)」。それらは新しい形の空間的実践を可能性にしている。情報時代における権力の行使にとって重要なことは、ネットワークの一部であること、すなわち、相互に結びついた結節点の集合である。ネットワークに接続するスイッチは特権化された権力の道具となる。「スイッチを司る者 switcher は権力の保有者である(同書： 471)」。さらに、スイッチを司る者が強力なのは、ネットワークに沿ったあらゆる端末や結節点を通じて表現されたり、そうした点に位置する社会的利益の価値よりも、唯一、「ハイレベルな社会的決定をもたらす」ネットワークという価値によるのである。初期の主張(Castells 1988)を繰り返すことで、彼は「フローの権力は権力のフローよりも優位にたつ」と言明する(1996: 469)。

カステルの技術的に駆りたてられた分析は、結局は折衷的でその場限りの図式の中に、フロー、ウェブ、結合性やネットワークといったポストモダニティの「新しい」地ー記述 geo-graphing の修辞をすべて含んでいる。ブルーノ・ラトゥール Bruno Latour(1993, 1997)によるネットワークの概念は、カステルの寄せ集めの概念よりも存在論的にはより根本的なものである。彼が「近代的構築 Modern Constitution」と呼ぶもの、それは、(1)「我々が自然を構築するとしても、自然はあたかも我々がそれを構築しないかのようである。」ということと、(2)「我々が社会を構築しなくとも、社会はあたかも我々がそれを構築するようである。」といった意味を持つ存在論を定めるのだが、そうした近代的構築の作用に挑戦することによって、ラトゥール(1993, 32)は、我々は決して厳密には近代的ではなかったと主張する。というのも、我々は近代的構築という用語に甘んじていないからである。あたかも巨大な中世の王国のようなサイボーグとモンスターという準ー客体と準ー主体の混合物は、認識されていない非近代的な世界を作り上げる社会ー技術のネットワークの増殖する産物である。これら自然ー社会ー客体ー言説の融合は、それほど数多く多様になったので、近代的構築をそのままに維持するために必要とされる浄化や変形といった行為を歪ませてしまった。我々の啓蒙的存在論は、人類と自然とがすべての種類の科学的で技術的なシステムと深くかみ合うような世界を理解するのに苦心している。

我々のポストモダニティがもたらした、主体、客体、アクターはすべて不純で、混合的で、境界的な創造物

である。我々の世界は人間と非人間の集合体によって構成されている、と彼は主張する。それは「アクターーネットワーク」の構成と述べるのがもっともふさわしい。それは、カステルによって技術的ないしは社会的ネットワークとして区別され、表現されたもの以上のものである。ラトゥール(1997)はアクターーネットワーク理論について、次のように書いている。すなわち、それは、「水準、層、領域、範囲、カテゴリー、構造、システムといった概念によっては決して捉えることのできない繊維、糸、針金、紐、ロープ、毛といった特徴を持つものと認めることによって初めて近代社会を描くことが可能になる…と主張するもので、文字通りネットワーク以外の何ものでもない」ものである、と。ラトゥールによれば、ネットワークの観点から考えることとは、近接性／隔たりそしてローカル／グローバルの区別、つまり、我々がこれまで慣れ親しんだ地理学を問題視することである。ラトゥールによれば、地図を描き、測定し、物理的な空間を三角測量するといった地理学という科学は、アクターーネットワーク理論には役立たない。というのも地理学は物理的な測定に基づいて近接性、距離、スケールという普遍的な尺度を定義しようとするからである。しかしながら、近接性、距離、スケールはネットワークの結合性によって定義される。ネットワークという概念は、我々が空間の定義における地理学者の横暴を取り除くのに役立ち、社会空間でも「現実」空間でもなく結合という概念を我々にもたらす(同書)。もし地理学が空間ではなく結合として再概念化されるとしたら、伝統的な「現実空間」の地理学は多数の中のひとつのネットワークにすぎなくなる。

これらの研究者や他の多くの理論家ーマルクスMarx、マンフォードMumford、ルカーチLukacs、ボードリヤールBaudrillardやヴィリリオVirilioーからの成果を使用することで、ルーク(1994,1995,1996c,本書[訳注4])は、人類と自然との関係の変化やこれらが生み出す可変的な環境と時ー空間の秩序とを概念化するために、マクルーハンのように示唆に富む3段階の語りを概説する。ルークは第一の性質から始める。それは人類と自然の関係が複雑な技術システムによってほとんど介在されない時ー空間という秩序である。この観念的な図式において、空間的秩序付けの原理は有機的であり有体的である。「人間の身体は、それぞれの伝統社会に見られたさまざまな方法で空間を測定し、距離を測り、時間を計り、秩序を定義した。(Luke 1996c: 123)」周囲の環境や生活世界は自然の生物世界である。もし第一の性質が地政学の性質を有するのであれば、それは領域的な視野と実践によって構成されたものである(表2を参照)[5]。

ルークの図式はそれほど連続的ではない。つまり、空間の古い秩序は確かに新しいそれにより継承され置き換えられるが、古い秩序は必ずしも消滅するわけではない。有機的な空間における原始的なコミュニティの社会的秩序は、都市の成立や国家の設立以前のみならず、それ以後も優勢だったのである(同書: 124)。ルカーチやマンフォードを真似ることで、ルークは、第二の性質を、18世紀以降の近代産業資本主義によって製造され、構築された人工的な技術世界として描く。その空間的な秩序は工業技術であり、その生活世界は人間やメカニックな機械によって作られた人工的技術世界であり、その景観は都市的で国家的であり、そのアイデンティティは、国民的、人民的、民族的である。局地的で有体的な第一の性質の技術とは対照的に、第二の性質は、鉄道、電線、蒸気船、舗装された道路、運河や電信／電話のシステムといったハードウェア複

表2 3つの地政学的性質 (Luke 1994, 1995, 1996c から)

第1の性質	第2の性質	第3の性質
農業的古代	近代工業資本主義	ポストモダン的情報資本主義
自然的生物世界	人工的技術世界	情報的サイバー世界
大地と神	地図と時計	テレビとコンピューター
有機的空間性	工業技術的空間性	サイバネティックス(通信制御的)空間性
土質性	領域性	遠隔測定性
生物のスケープ／ 生態のスケープ／地のスケープ	民族のスケープ／ 計測のスケープ／富のスケープ	サイバーのスケープ／ 情報のスケープ／メディアのスケープ

合体の発展によって空間化される(同書: 125 ; Mattelart 1996)。空間は国家やこれらのハードウェア複合体によって支配されている。要するに、これは、近代的な領域地政学の典型的時代であり、地球の陸地、海洋、資源を占有するために明確に区切られた空間的実体が争いを繰り広げる典型的な時代である。

ルークの図式の最も刺激的な側面は、空間的秩序付けがサイバネティックシステムによって形成されるような第三の性質という別個の領域を彼が明示したことにある。これが情報的サイバー世界という領域であり、その電子的景観は、ポストモダン的情報資本主義のサイバーのスケープ、情報のスケープ、メディアのスケープである。第二の性質の形式と構造は、進んだ資本主義とそのグローバル化した情報構造の衝撃の下で、ゆがみそして崩壊し始める。「サイバネティックコード、テレビのイメージや情報マルチメディアのようなソフトウェアのシステムはハードウェアの決定的重要性を否定する。…遠隔測定性という第三の性質が、情報化が既存の文化や社会の空間化された操作的な可能性を急速に倍加させる所に出現する(Luke 1996c: 127)」。モダン的な地ー記述 geo-graphing はポストモダン的な情報ー記述 info-graphing になる(Luke 本書訳注 4))。人々の集団はグローバルウェブに加わり始めるが、一方でフローという活気付いた空間は、ローカル、ナショナル、グローバル間の伝統的な区分を蝕み、再編成されたグローカル空間から成る「新ー世界秩序」の数量的な原動力を生み出す(Luke 1995)。著しく機械化された社会集団において新しくネットワーク化された行為主体、つまり準ー主体のサイボーグと準ー客体の「人間ー機械humachines」が第 3 の性質に存在し、そうした性質に機能的な存在論を与える。もっとも、ハラウェイ Haraway に反して、その政治は、神話的で寛大なカテゴリー、アイデンティティ、物語によって未だに支配されてはいないのだが(Haraway 1991; Luke 1996c, 1997)。

こうした図式的な理論化のすべてには問題がある。国民経済の衰え、企業の国籍の不適切性、グローバリゼーションといったものを過大評価したために、ライヒが批判されてきたのは当然である(Hirst and Thompson 1996: 96)。カステルは、その技術決定論、軽率な折衷主義、過度に拡大された還元主義的主張であるとして批評されるのも当然である。ラトゥールの図式は、我々が継承してきたすべての存在論的な概念をネットワークへ融解するおそれがある。それは概念を膨れ上がらせ非歴史化し、その結果、控え目な洞察を生むだけである。ルークの図式は、あまりにも大雑把で、抽象的で、知的に同一構造であるとして、すなわち、今日の世界政治の、「現実的」ではあるが「超現実的」ではないジレンマとドラマに対して適切性の疑わしい学問的実践として非難することができる(反証は Luke 1991, 1993 を参照)。

表 3　モダン地政学とポストモダン地政学の対比

モダン地政学	ポストモダン地政学
地図的な視覚化: 地図	遠隔測定的な視覚化: GIS
遠近法的劇場	ポスト遠近法的シミュレーション
内部／外部, 国内／国際	グローバルウェブ,グローカリゼーション
東／西	ジハード派／マックワールド派
領域的権力	遠隔測定的権力
ハードウェア優位: GPR	ソフトウェア優位: C4I2
領域的な敵	脱領域化された脅威
固定的で硬直的な配置	柔軟的, 俊敏な反応
地政学的人間	サイボーグ集団
国家／指導者	ネットワーク／サイボーグ

それにもかかわらず、こうした図式的な理論化は、現代の出来事に内在する傾向を明らかにするのに有効である。アグニューの主張をルークや他の研究者の示唆に富む主張と組み合わせて、筆者は、精錬されたモダンを内在的なポストモダン地政学と区別する表を作成してみた(表 3 を参照)。この表は、世界政治における支配的国家によって実践されるような地政学的問題群の中心となる 5 つの重要な問題からまとめ上げられている。これらの問題は以下のようなものである。

1　グローバル空間はどのように想像され表象されるのか。
2　グローバル空間はどのようにアイデンティティや差異という本質的なブロックや地帯に分割されるのか。
3　グローバル権力はどのように概念化されるのか。
4　グローバルな脅威はどのように空間化され、反応戦略はどのように概念化されるのか。
5　地政学を形作る主要なアクターはどのように識別され、概念化されるのか。

このような課題には限界があるものの、これら5つの論点に取り組むことによって、批判的な関心をもつに足る、20世紀末における地政学の可能性の条件について、何らかの一般的傾向を明らかにできる。表に示した区分から強調され、解明されることは、制度、知識人やアクターネットワークから成るアメリカの戦略的複合体の実践においてすでに認められる表現の傾向である。

第一の問題は現在の世界政治において遠隔測定的な視覚化の重要性が高まることを示す。1995年に、ボスニア戦争の講和条約がオハイオ州デートンのライト・パターソン空軍基地で開かれたことは偶然ではなかった。そこは「生体工学 bionics」の言葉が始めて作り出された所であり、世界で最も進んだ地理情報システム（GIS）や視覚化技術のいくつかがある場所である(Gray 1997: 19)。そこで、交渉に関わった人々は、「任天堂」ルームを訪れることが出来、問題となっている領域に関する最新の三次元地図を見、分割線や境界線を正確に決定することができた。国務長官ワーレン・クリストファーWarren Christopher によれば、テクノロジーは、交渉に関わった人々がその地域の上に「飛行」し、「彼らが話してきたことを実際に見る」ことを可能にしたのである(Gray 1997: 19 から引用)。しかし、彼らが「実際に見ている」ものは、もちろんシミュレーションであり、デートンにおいて実際の地域そのものよりもより本物になった実物のモデルである。

デートンにおけるGISを用いた地図の変換、すなわち、ポストモダン的な遠隔測定的シミュレーションによるグローバル空間のモダン地図学的表象は、世界政治が20世紀末期においてどのように想像され視覚的に表象されているのかに関する、幅広い技術文化的な変質の兆しである[6]。グローバルに配置された24時間ニュース機器の絶え間ない操作によって、世界政治のドラマは情報スペクタクルへと変えられた。すなわち、フロー構造flow-mations（フローメーション）におけるその実際の生活から形式をとるというスペクタクルである。混乱状態の街路、民主主義的行動、クーデター活動といったテレビによる映像や簡単に認識できる文字として、絶えず写し出され映像化される世界政治が、20世紀前半における地政学者にとってそうであったような、劇場で演じられるドラマのようではなくなってしまって久しい。今やテレビによって映し出される光景や軍事シミュレーションというハイパーリアルな世界、すなわち、すべてを取り囲みそして圧倒する情報の世界である。CNNが回す地球は情報的に回転する地球である。余り物となってしまった政治的リアリズムの修辞は、もはやめまぐるしい世界状況に対処できない。視覚はめまいによって遮られてしまった(Ó Tuathail 1996)。情報のスピード、量、強度は、熟考と決断としての外交政策のまさしくその可能性を疑問視する(Luke and Ó Tuathail 2000 訳注5))。

第二の問題は、とても多くの政治的リアリストによって想像された別個の国民ー国家というユークリッド的世界の崩壊の前提となるものである。内部と外部、国内と国際の間のはっきりした境界を維持することは、政治的パフォーマンスの問題であったし今でもそうである(Walker 1993; Campbell 1992; Weber 1995)。しかし、それは今日では、グローバル化によって脱領域化し、スケールが混乱した結果、より複雑化し入り組んだものとなっている。アパデュライ Appadurai (1996)が主張するように、脱領域化という我々のポストモダン的条件においては、「人々、場所や遺産の輪郭は見かけ上の同形性をすべて失う」のである。現代の文化形態は、「根本的にフラクタル、すなわち、ユークリッド的な境界、構造、規則性 をもたないようなものである(同書: 46)」。「分離的なグローバルフローの世界」において、我々が問う必要のある問題は、「秩序、安定性、系統性という旧来のイメージよりも、フローや不安定性すなわち混乱というイメージ」に頼るべきなのである、と彼は示唆する(同書: 47)。このことは、世界政治が必然的に領域国家の想像性を超越したことを示すのではなく、その伝統的で神話的なユーグリッド的形式の崩壊を認めることであり、脱地方化された超国家 trans-nation(同書)、シミュレーション化された主権(Weber 1995)、ポストモダン的戦争 (Gray 1997)、脱領域化された通貨(Kobrin 1997)や、グローカル化されネットワーク化された生産と消費の経済(Burton 1997)という奇妙な新しい融合（混乱）を認知することである。

伝統的な二元論的概念が今やジハード対マックワールドのような新しい名ばかりの脱空間的二元論となるにつれて(Barber 1996)、多くのコメンテイターや外交政策分析者が今日問いかけている問題は、近代性／後進性、東／西、といった伝統的な二元的空間概念（そ

れから派生した冷戦という「三つの世界」）にもはや依存しない、ということが主張されている。マックワールドはグローバリゼーション、ミュージックテレビ、マッキントッシュやマクドナルドという脱領域化の歩調を表現するもので、それは世界を横切って広がる自由市場やファーストフードのユートピアである。ジハードは、原始主義者の反応、原理主義的神話に対する応酬、道徳的絶対性、境界が崩壊しつつある世界における礎のような確実性といったものを表現する。たぶん、この語りやそれに関するバリエーションは、アグニューが近代地政学と認めた空間の階層化に対するポストモダン的な相当物であるかもしれない。確かに、バーバーBarberによる二元論の主張の一部は、彼自身の意思とは無関係に、オリエンタリストが久しくイメージした地理を暗に再復活させている。トランスナショナルな自由主義者にとって、マックワールドは世界の明白な運命（マニフェストデスティニー）であり、ジハードは前時代の共産主義のように、多くの不和を引き起こす潜在性を持つ危険な「変遷性の病気」である。ジハードの戦士は、時計の針を戻し歴史という市場の運命の加速化を逆流させようとする、原始主義者であり、欺かれた熱狂者であり、宗教イデオローグであるとみなされる。地理的にはイラクやスーダンといった国に集中しているとはいえ、彼らは世界中に広がる脅威なのであり、アメリカ国内でさえもそうである。西洋自由主義の存在論から生み出だされたバーバーの主張は、民主主義にとってマックワールドとジハード双方の意味の混乱に関する批判である。しかし、この言葉は至る所で、ジハード派に対してマックワールド派を動員するための言説として使用されてきた（バーバーの理論を引用したクリントン大統領のように; Barber 1996: 299）。パトリック・ブキャナン Patrick Buchanan、ウラディミール・ジリノフスキーVladimir Zhirinovsky やジャン＝マリ・ル・ペン Jean-Marie Le Pen のような「グローバル化の申し子」によって持ち出される脅威という呪文は、現代の世界政治における脅威という影響力の大きい言説となっている(Luke and Ó Tuathail, 1998; Rodrik 1997b)。

第三の問題によって生み出された領域的と遠隔的の対照は容易に誇張される。しかし、それにもかかわらず、それは今日のグローバル権力に関する何らかの戦略的分析の言説をまさに繰り返している（例えばRosencrance 1996）。今日の時代における権力の重要性を評価しながら、ナイ Nye とオーウェンズ Owens (1996, 22) は、20世紀初期の地政学の伝統的な関心である地理、人口、資源／原材料（GPR）の重要性が衰えたのに対してテクノロジー、教育、制度上の柔軟性の重要性が増したと書いている。情報革命を最もよく先導することのできる国家は他のすべての国家より強力になるだろうと彼らは示唆する。彼らにとってはその国家とはアメリカである。他のライバルに対する「その捉えにくい比較優位性」とは、「情報を収集し、処理し、それに対して行動し、普及させる能力であり、今後 10 年間の間に確実に成長すると思われる強みでもある」（同書: 20）。この「情報の強み」は「比較的低いコストで伝統的な軍事的脅威を抑止し、うち負かすのに役立つ。それは、おそらくアメリカの外交政策と軍事力との間の知的関連性を改善し、加えてリーダーシップの維持と同盟を固める新しい方法を提供することを可能にするだろう。総じて、アメリカの持つ情報の強みは、その軍事力というハードな部分とその経済力やイデオロギーの力というソフトの部分における潜在性を大きくする「力の増殖器」である。ソフトウェアの力は現存するハードとソフトの力を両者を足したものへと転換させるのである。

情報化という予期しない結果を理解せずに(Levidow and Robins 1989; Rochlin 1997; Shenk 1997)、ナイとオーウェンズは、ＩＳＲ－情報収集、監視、調査－やC4I－指揮（コマンド）、管制（コントロール）、伝達（コミュニケーション）、コンピュータ－管理（プロセス）、諜報（インテリジェンス）－を評価する。さらに、グレイ Gray (1997: 7) は、紛争という状況においてアメリカ軍に「優位な戦場の情報」を提供する、C4I2[訳注 6]と表現される共同利用性を付け加えている。潜在的紛争地帯の監視をリアルタイムで継続的に行うアメリカの能力は、「危機前の透明性」と「情報の傘」をアメリカにもたらす。これらは、冷戦における核の傘という方法にちなんで、条件が保証されれば同盟国と共有する武器としてアメリカの意思決定者が使用できる。「拡張された抑止のように」、アメリカの情報能力は「お互いに有益な関係のための基礎を作り上げることができる」。外交の道具として情報を使うことにより、アメリカは、「正確でリアルタイムな状況に応じた認識」を一定の国々へ供給することによって、こうした国々が密接にアメリカと動くように導き、しむけることができるだ

ろう。この理解に内在することとは、地－記述 geo-graphing がすでに情報－記述 info-graphing になってきているとともに、地政学が情報－政治学 info-politics になるという状況である。

ナイとオーウェンズは ヘンリー・ルース Henry Luce が 20 世紀中期に述べたアメリカの例外主義という主張の更新された情報バージョンを述べて結んでいる。彼らが宣言した情報とは、「国際領域の新たな硬貨」であり、アメリカは、情報を通じてそのハードとソフトの力の潜在性を増加させることに対して、他の国家よりも優位な立場にある(1996: 35)。 20 世紀ではなく、21 世紀はアメリカが最も卓越した世紀になることであろう。情報化にともなって、アメリカの国家例外主義という古い主題はもう一度繰り替えされる。サイバースペースは自由を拡大し、アメリカの特性を鋳造する最新のフロンティアである(Dyson その他. 1994) 。しかしながら、逆説的なのは、情報化が堅固な国家の存在や旧式のフロンティアを脱構築するということである。堅固な国家の存在となる代わりに、「アメリカ」は十分に情報化された世界の中で、グローバルネットワークの結節点すなわち、アメリカが（ハイパー）リアリティにおける古いコードというシミュレーションになるにつれて、機能性における変換点となるだろう。さらに、「アメリカの特性」は十分にサイバー組織化 cyborganized 化されたそれになるかもしれない。C4I2 は単なる一群の道具ではなく、脱領域化された遠隔測定的な文明である。そして、それは、「それを利用して未来の社会が組み立てられるような社会－経済－技術的構造の道具一式」の一部なのである(Rochlin 1997: 211)。

しかしながら、アメリカのソフトウェア文明への新たな脅威が明らかになりつつある。もしくは、より正確には、情報時代のフローとネットの中で次元性が再調整されているために(Virilio 1997)、新たな驚異が差し迫っているのである。脅威の空間化と反応の概念化に関する第 4 の問題は、今日の戦略的ドクトリンにおける柔軟性とスピードに関する、一定の流行的なテーマを強調する(Virilio and Lotringer 1983)。冷戦以後、安全保障の意味が本質的に論議されており(Dalby 1997)、脅威は、単に封じ込めという強制力が未だに有効な領域的な敵から発生するのではなく、脱領域化された過剰な脅威から発生するものとして益々表現されるようになっている。そうした脅威とは、国家なきテロリズム、サイバネティクな破壊活動(Gray 1997)、麻薬テロリズム、世界的な汚職(Leiken 1996)、感染性の病気(Garrett 1996)、人道主義の危機(Luke and Ó Tuathail, 1997)、環境の悪化(Dalby 1996)や、大量破壊兵器の拡散(Sopko 1996)である。実体がなく国籍もないテロリズムは、徐々に複合的な相互依存システムを標的とするようになってきている。そうしたシステムとは、地下鉄、世界貿易センター、超高層ビル、空港、ネットワークコンピューター、通信ネットワークステーション、データーベース、通信拠点といったマックワールドのフロー空間であり、マックワールドは彼らが最も大事にする神話を包み込み、侵食（同時に電子装備する）しているのである。

冷戦的戦略がもつ、通常の範囲を超えた封じ込めの命令や固定的な配置とは対照的に、不変の領域的関心と増加する脱領域化された脅威への反応として必要とされたのが、柔軟性とスピードを前提とした地－戦略的ドクトリンである。1995 年に出された、『アメリカ国家軍事戦略 National Military Strategy』には、「柔軟で選択的な交戦戦略」と副題がつけられていた(Joint Chiefs of Staff 1995)。脅威は広範で不確かなもの、ありそうな紛争の可能性として記述されている。しかし、それらの地理的位置は予想できない場合があまりにも多い。この報告書は、現行の戦略的展望を、アメリカ軍が最も精力を傾けなければならない 4 つの主要な危険性によって特徴付けられるものとして書かれている。それらは、「地域的不安定、大量破壊兵器の拡散、麻薬取引やテロリズムのような国境を越える脅威、そして、旧ソ連、東ドイツその他における民主主義と改革に対する脅威である(同書: 1)。これらの脅威について注目されることは、いずれも固定された空間的位置を持たないことである。つまり、地域的不安定性は中東のみならずヨーロッパやアフリカにもあてはまり、危険性の増大と越国境化は世界的であり、特定の場所とはっきり結びついた唯一の脅威である改革への脅威ですら、「他のどこか」が示すように潜在的にはいたるところにあるのである。軍事的戦略は今でも場所や領域をうまく処理する必要がある。しかし、興味深いことに、それは場所や領域から解放されるようになってもきた。今や世界のいたるところが潜在的な戦場である。報告書は、世界的な安全保障利害と結びついたグローバル

な相互依存性や透明性が、地球のほとんどいたるところで展開する難問を無視するのを困難にしていることを認めている（同書: 2)。

どこにでも潜在的に存在する脅威に反応するため、アメリカ軍は今、中心となる2つの戦略的概念で組織されている。それは、海外駐留軍とパワープロジェクションである。海外駐留には、地球全体におけるアメリカ軍の駐留だけでなく、地方的および地域的な戦力をもつ同盟国の展開、一定の場所に前もって配置される装備や、地球上に展開する空、陸、海軍の日常的プログラムの維持が含まれる。パワープロジェクションとは、海外駐留アメリカ軍のいろいろな部隊を、密集し、C4I2化された、多選択（マルチオプション）な交戦力へと組織化するアメリカ軍の能力である。それは、戦略的動員と、作戦にとって重要な情報の調整、スピード、柔軟性といったものを伴う機動性とを含む。俊敏な地政学 fast Geopolitics のように敏捷で、柔軟性のあるパワープロジェクションは自由主義政治のために時間を購入する(Luke and Ó Tuathail 1998)。つまり、「俊敏な戦略的機動性を通じて、うまく整えられた軍隊を投入する能力は、国家指導者に協議のための追加的な時間と潜在的な危機と紛争に反応するための選択肢の増加を与えるのである(Joint Chiefs of Staff 1995: 7)。」。このような戦略の論理は、速度論的 dromological な危機状況において柔軟な決断の時間をつくるための軍事的高速兵器による空間の消滅である。この制度上の結果が、空間を破壊するスピードに特化したサイボーグによって配置された世界に広がるネットワークの集合体としてのアメリカ軍の再編成である。このことはアメリカの軍事ドクトリンにおいて「戦略的機動性の増大」と述べられており、「空輸能力の増大、海上や沿岸用の重装設備の付加的な事前の配備、しけに対する海上輸送能力の増大、即戦的予備戦力 Ready Reserved Force の即戦力性と反応性の向上」（同書: 7)といった4つの構成要素と規則とから成っている。自由主義は我々にサイボーグのような生活様式を与える。それゆえ「我々の」この世は全くサイボーグのようである。

第5の問題で前面に置かれたものは、20世紀の終わりに地政学の理論化と実践の一部として明らかとなった集合体やサイボーグの問題と、未だ承認されず理論化の途上にあるものとの対比である(DeLanda 1991を参照)。批判地政学者達は、世界政治において人類と非人類の集合体がもつ、広く普及してはいるものの問題視されていない存在と匿名的で特色のない機能とを認め始める必要がある(Luke 1997)。現在の地政学は、明らかに軍事的集合体とそれらのネットワークに生活と生命とを与えている。しかし、日常の集団のネットワークは秘密の地政学的生活を持っているのだろうか。ラトゥールの方法、つまり、ほんの短い関係のための、我々の自動推進的なネットワークに従ってみよう。そうすれば、まさにこれまで述べてきた軍隊のネットそのものや他の多くの地政学的な準－客体と準－主体とに、我々はすぐに出くわすだろう。それは、石油輸送タンカー、サウド家 the House of Saud、オートサイボーグ、フォーディズム、石油利権政治 petrol pump politics、ジョージ・ブッシュ George Bush、ナイジェリア軍、高速兵器 dromomechanics、エクソン社、空母、汚染された浜辺、そして枯れかけた森林である。日本の移転工場や戦略的要衝によって、どんな奇妙な生活様式が明らかになるのか。そして「GM やエクソンにとって利益となるようなことはアメリカにとって利益なのだろうか」。さらにネットワーク化すれば、我々は、優れたサイボーグ生物、人造人間 Hydrocarbon Man とその超機械的な高速性、西洋の石油崇拝集団、現実的にしろ想像的にしろ、あらゆる脅威に対して、そのスピードのスケープや生命線に対して、原始的で暴力的に反応する、発展した、貪欲的で、加速的な生活形態と出くわす(Virilio 1995)。自動推進のアクターネットワークを追跡すれば、湾岸戦争や他の多くの戦争がたちまちのうちに姿を現すだろう(Yergin 1991)。ネットワークの集合体は、それが殺し、消耗させるように生きそして拡大する。集合体の中には、我々がなお想像するものが「自然」や「人間の居住環境」であることへの、集合体の有害な影響について異議を唱えることができる良心的なサイボーグもいる。しかし、どんなサイボーグもその集合体を制御し解体するほど十分に強力ではないであろう(Luke 1996a)。我々がそうした集合体を有するというより、集合体が我々を有するのである。集合体が我々にその地政学を与えるのである。

アクターネットワークは地政学的生活を持っている。そして今や、世界を見つめ、それを支配するのに必要な秘訣を予言するマッキンダーMackinder のような地政学者の話を記録に留めるよりも、こうした地政学的

生活を認め理論化する時期である。地政学における媒介者は今、完全にサイバー組織化 cyborganized されたネットワークであり、地政学者ではない。新しくサイボーグ化された地政学的生活の諸形式は、我々の急増するネットワークによって絶えず理解され、競争的で協力的な集団の不安と空想とを絶えず表現している。多分ラトゥールは正しいだろう。そして、モダン地政学やポストモダン地政学について話すことすら誤解なのである。というのも、我々が住む世界ーそこでの「我々」は、技術的な生活援助システムによってすっぽりと覆われ囲まれた、高度にサイボーグ的なアイデンティティとして認識されるーは断固として非モダンであるからである。非モダン地政学を批判的に問題視する時期を迎えているのかもしれない。

(ポスト)モダン地政学の連続性と変化

アグニューとコーブリッジは、彼らの地政学研究において、連続性と変化の両方を絶えず強調し続けてきた。『空間の支配 *Mastering space*』の中で、彼らは、時制的なたとえ(近代的/後進的)によって表現される差異の言葉を絶えず用いながら、近代地政学的言説に貫徹する明白な連続性があると宣言する。しかしながら、この語の語法の特質やコンテクストは、時間の経過とともに劇的に変わった(1995: 51)。アグニューは『地政学』においてこのテーマに戻る。そして、空間的実践と空間の表象との弁証的な相互作用の結果として、近代地政学的想像力は、「根本的な連続性を持ちながらも、内容と形式において劇的な変化を示している。…一般的な連続性のうちに…地理的な表象と実践が世界政治において暗に重要な変化を経験した特有の時代を認めることができる。」(1998: 6-7)と記している。

月並みの言葉のあやはたいていたわいのないものである。それにも関わらず、この連続性と変化というテーマは、時折、モダンおよび(もしくは)ポストモダンについての図式的理論化を避けるという一定の知恵を表現する。モダンおよびそのポストモダンへの変化を指し示すという、当時/現在のゲームをするにおいて、人間の歴史という厄介で混乱した複雑なものを明確で正確なカテゴリーへ総括し、刻印づけ、秩序づけるように作用する、抑えられない衝動がたびたびみられる。時には、興味をそそる理論的な美的価値が作用する場合がある。それは、歴史という閉塞的な密度から救い出された理論的対照性、超越的対称性、および優雅な異種同形に対する賞賛なのである。学術的な論文に明確に示されるように、ポストモダン文化全般の特徴である誇張法の標準化という意味が含まれる場合もある(Shenk 1997)。

マン Mann(1996: 1964)は、「過去と現在において、ある程度の混乱といったものは、もしかしたら最も一般的な人間社会の特徴なのかもしれない」と主張する。彼がその研究において主張している社会は、様々なスケールで機能する相互作用という、多元的で絡み合ったネットワークから成る。社会は非常に複雑であり、単一のアイデンティティ、明確な境界、すべてを包含する本質を伴う「システム」と考えられるべきではない。マンはラトゥールのようには疑問視していないけれども、彼の強調する点は、ネットワーク化された社会関係の性質に関してであり、国民ー国家主義/グローバル主義の二元性に対抗して、「我々は、トランスナショナルもしくはグローバルによって『本質的に』構成された社会に生きているのではない。」ということに注目している(1996: 1960)。このことは、また我々が本章で使用しているカテゴリーと寸分違わない。我々は本質的に、モダンもしくはポストモダン地政学によって構成されている世界に生きているのではなく、現在の、視覚技術、輸送技術、コミュニケーション能力、戦争兵站学、ポリティカルエコノミー、国家形態、世界的危機、空間的存在論や広く普及した不安といったものへの参加点である地政学理論や実践の局面的な固定化によって構成されている世界に生きているのである。事実、過去、現在、未来の連続的な概念と関連する「我々の時代」もしくは「現在の」というまさにこの概念は、空虚な過去、後回しにされ未解決の現在、強制的で魔性的な未来とから成る、複数の技術的に媒介された時間性が、「今」を構成し安定させるために闘争するような状況にあっては不適切である(Derrida 1994; Virilio 1997)。モダンおよびポストモダン地政学というカテゴリーは教育学的な価値を持っているけれども、現在の社会ー空間的および社会ー時間的な実践の密度、複合性、不純性によって、我々はいかに理論を理解し損ねてきたかを、我々はいつも認識しなければならない。控え目に注意するならば、融合(混乱)され、細分化され、フラクタルな 21 世紀のポスト/非

／モダン地政学を、我々が苦労して解き、説明しようとしているように、今は記憶する価値のある点なのである。

謝辞 本稿の草案への論評を下さったことに対し、ジョン・アグニュー、ティモシー・W・ルーク、ナイジェル・スリフト Nigel Thrift にお礼を申し上げたい。

注

1) この語句は消滅してしまったようだ。アグニューとコーブリッジ(1995: 9)の「地政学的経済秩序」がそれに最も近い語句である。しかし、アグニュー(1998)にはこの語句は見られない。

2) アグニューとコーブリッジはルフェーブルの混乱をまねく「表象的な空間」というカテゴリーを彼らの図式に幾分ぎこちなく言い換えてもいる。ルフェーブルでは、芸術家、作家、哲学者によって想像された想像的空間として特有に定義される「生きられた空間」と一致するカテゴリーである。アグニューとコーブリッジ(1995: 7)では、それは「空間的実践の変形を目論んで、空間の表象における変化を示唆する未来の空間的実践もしくは『想像された地理』のためのシナリオ」になる。この解釈では、空間の表象と表象的な空間との区別は決して明瞭ではない。

3) トルデシーリャス条約（1493 年と 1494 年）と後のサラゴサ条約（1529 年）によって引かれた境界線は、ルネッサンス時代のヨーロッパ人が地表面の均質性を信頼していたことの証拠である。というのは、彼らは未だスペインともポルトガルともどちらでもないと思われていた陸地や海を分割したからである、とクロスビィ Crosby(1997: 106) は主張する。ローマ教皇がそれらの線引きを行う手段であるとしても、同質でそして潜在的に無限なものとしての地表空間という概念は、垂直的に神聖視される階層的な秩序の一部としての伝統的な中世の空間概念とは別個のものである。

4) グローバリゼーションは脱領域化されたグローバルな経済の到来を告げるものとして絶えず表現されてきたが、多くの評論家が指摘してきた様に、我々はまだ3つの（ヨーロッパ、アメリカ、東アジア）卓越する国際政治的経済に生きている (Castells 1996; Rodrik 1997a; Hirst and Thompson 1996)。経済的グローバル化に関連した誇張法は、トランスナショナルな自由主義（ネオリベラリズム）と密接に関連したイデオロギーとしてのグローバリゼーションの作用によって部分的に説明可能である(Cox 1996; Herod, Ó Tuathail and Roberts 1998)。

5) 厳密に言えば、地政学は、空間の内部記述とグローバル空間を横切る近代の領域的地図の押し付けとに関連するルークの図式において、第2の性質の現象である。しかし本章において、私は、その問題構制としての国政－古代、モダン、そしてポストモダン－と関連した地理的表象と実践とを認めるという、地政学の幅広い概念を持ちつづけたい。

6) 今日の戦争における視覚化の運命を考えみよ。地図を繊細に調べるよりも、今日では、「副官は、現場の司令官が電子的な戦闘指令所において行きつ戻りつし、テレビ画面をいじくり、最前線のパイロットや戦車指揮官と無線で話したり、おそらく彼らの肩越しにリモートカメラを通して覗いているのを見る可能性が高いだろう」(Cohen 1996: 49-50)。

訳注

1) 本文では6となっているが、おそらくこれは5の間違いであろう。

2) 本文では1となっているが、おそらくこれは51の間違いであろう。

3) 本文では Matellart と記述されているが Mattelart の間違いであろう。

4) Luke, T. (1998) Running flat out the on the road ahead. Nationality, sovereignty, and territoriality in the world of the information superhighway, in G, Ó Tuathail and Simon Dalby (eds). *Re-Thinking Geopolitics*, London: Routledge.

5) 本文では近刊書 forthcoming となっていたが、指定の文献は 2000 年に出版された。

6) C4I2 とは、指揮（コマンド）、管制（コントロール）、通信（コミュニケーション）、コンピューター管理（コンピュータ）、諜報（インテリジェンス）、情報（インフォメーション）である。

文献

Agnew, J. (1994) The territorial trap: The geographical assumptions of international relations theory. *Review of International Political Economy*, 1: 53-80.

Agnew, J. (1998) *Geopolitics: Re-Visioning World Politics*. London: Routledge.

Agnew, J. and Corbridge, S. (1989) The new geopolitics: The dynamics of geopolitical disorder, in R. J. Johnston and P. J. Taylor (eds) *A World in Crisis?: Geographical Perspectives*, second edition. Oxford: Blackwell, 266-288.

Agnew, J. and Corbridge, S. (1995) *Mastering Space*. London: Routledge.

Appadurai, A. (1996) *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*. Minneapolis: University of Minnesota.

Barber, B. (1996) *Jihad vs McWorld*. New York: Ballantine. バーバー,B.著, 鈴木主税訳 (1997) 『ジハード対マックワールド－市民社会の夢は終わったのか－』 三田出版会.

Burton, D. (1997) The brave new wired world. *Foreign*

Policy, 106: 23-38.

Campbell, D. (1992) *Writing Security*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

Campbell, D. (1996) Political prosaics, transversal politics, and the anarchical world, in M. Shapiro and H. Alker (eds) *Challenging Boundaries: Global Flows, Territorial Identities*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

Castells, M. (1989) *The Informational City*. Oxford: Blackwell.

Castells, M. (1996) *The Rise of the Network Society*. Oxford: Blackwell.

Cohen, E. (1996) A revolution in warfare. *Foreign Affairs*, 75: 37-54.

Cox, R. (1987) *Production, Power and World Order*. New York: Columbia University Press.

Cox, R. (1996) A Perspective on globalization, in J. Mittelman (ed.) *Globalization: Critical Perspectives*. Boulder, Colo.: Lynne Rienner.

Crosby, A. (1997) *The Measure of Reality*. New York: Cambridge University Press.

Dalby, S. (1996) The environment as geopolitical threat: Reading Robert Kaplan's 'Coming Anarchy.' *Ecumune* 3: 472-496.

Dalby, S. (1997) Contesting an essential concept: reading the dilemmas in contemporary security discourse, in K. Krause and M. Williams (eds) *Critical Security Studies*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 3-31.

DeLanda, M. (1991) *War in the Age of Intelligent Machines*. New York: Swerve.

Derrida, J. (1994) *Spectres of Marx*. New York: Routledge.

Doty, R. (1996) *Imperial Encounters*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

Dyson, E., Gilder, G., Keyworth, J. and Toffler, A. (1994) A magna carta for the knowledge age. New *Perspectives Quarterly*, 11, 4: 26-37.

Garrett, L. (1996) The return of infectious disease. *Foreign Affairs*, 75: 66-79.

Gray, C. H. (1997) *Postmodern War: The New Politics of Conflict*. New York: Guilford.

Gregory, D. (1994) *Geographical Imaginations*. Oxford: Blackwell.

Greider, W. (1996) *One World, Ready or Not: The Manic Logic of Global Capitalism*. New York: Simon & Schuster.

Grovogui, S. N. (1996) *Sovereigns, Quasi Sovereigns, and Africans*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

Haraway, D. (1991) *Simians, Cyborgs and Women*. New York: Routledge. ハラウェイ, D.著, 高橋さきの訳 (2000) 『猿と女とサイボーグ－自然の再発見－』 青土社.

Harvey, D. (1996) *Justice, Nature and the Geography of Difference*. Oxford: Blackwell.

Herod, A., Ó Tuathail, G. and Roberts, S. (eds) (1998) *An Unruly World? Globalization, Governance and Geography*. London: Routledge.

Hirst, P. and Thompson, G. (1996) *Globalization in Question*. Cambridge: Polity.

Joint Chiefs of Staff (1995) *National Military Strategy of the United States of America*. Washington, DC.: US Government Printing Office.

Kobrin, S. (1997) Electronic cash and the end of national markets. *Foreign Policy*, 107: 65-77.

Kofman, E. and Young, G. (eds) (1996) *Globalization: Theory and Practice*. London: Pinter.

Latour, B. (1993) *We Have Never Been Modern*, translated by Catherine Porter. Chambridge, Mass.: Harvard University Press.

Latour, B. (1997) On actor-network theory: A few clarifications. Available from http://www.keele.cstt.cstt.latour.html.

Lefebvre, H. [1974] (1991) *The Production of Space*, translated by Donald Nicholson Smith. Oxford: Blackwell. ルフェーブル, H.著, 斎藤日出治訳・解説 (2000) 『空間の生産』 青木書店.

Leiken, R. (1996) Controlling the global corruption epidemic. *Foreign Policy* 105: 55-73.

Levidow, L, and Robins, K. (1989) *Cyborg Worlds: The Military Information Society*. London: Free Association Books.

Leyshon, A. (1996) Dissolving difference? Money, disembedding and the creation of 'global financial space,' in P. W. Daniels and W. F. Lever (eds) *The Global Economy in Transition*. Harlow: Longman, 62-80.

Luke, T. (1991) The discipline of security studies and the codes of containment: Learning from Kuwait. *Alternatives*, 16: 315-344.

Luke, T. (1993) Discourses of disintegration, texts of transformation: Re-reading realism in the new world order. *Alternatives*, 18: 229-258.

Luke, T. (1994) Placing power/siting space: The politics of global and local in the New World Order. *Society and Space*, 12: 613-628.

Luke, T. (1995) New World Order or neo-world orders: Power, politics and ideology in informationalizing glocalities, in M. Featherstone, S. Lash and R. Robertson (eds) *Global Modernities*. London: Sage.

Luke, T. (1996a) Liberal society and cyborg subjectivity: The politics of environments, bodies, and nature. *Alternatives*, 21, 1-30.

Luke, T. (1996b) Governmentality and countragovernmentality: rethinking sovereignty and territoriality after the Cold War. *Political Geography*, 15: 491-508.

Luke, T. (1996c) Identity, meaning and globalization: Detraditionalization in postmodern time-space compression, in P. Heelas, S. Lash and P. Morris (eds) *Detraditionalization*. Oxford: Blackwell.

Luke, T. (1997) At the end of nature: Cyborgs, humachine and environments in postmodernity. *Environment and Planning A*, 29: 1367-1380.

Luke, T. and Ó Tuathail, G. (1997) On videocameralistics: The geopolitics of failed state, the CNN international and (UN) governmentality. *Review of International Political Economy*, 4: 709-733.

Luke, T. and Ó Tuathail, G. (1998) Flowmations, fundamentalism and fast geopolitics: 'America' in an accelerating world, in A. Herod, G. Ó Tuathail and S. Roberts (eds) *An Unruly World? Globalization, Governance and Geography*. London: Routledge.

Luke, T. and Ó Tuathail, G. (2000) Thinking geopolitical space: War, Speed and vision in the writings of Poul Virilio, in P. Crang and N. Thrift (eds) *Thinking Space*. London: Routledge.

Mann, M. (1996) Neither nation-state nor globalism. *Environment and Planning A*, 28: 1960-1964.

Mattelart, A. (1996) *The Invention of Communication*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

Mittelman, J. (ed.) (1996) *Globalization: Critical Reflections*. Boulder, Colo.: Lynne Rienner.

Morley, D. and Robins, K. (1995) *Space of Identity: Global Media, Electronic Landscapes and Cultural Boundaries*. London: Routledge.

Murphy, A. (1996) The sovereign state system as political-territorial ideal: historical and contemporary considerations, in T. Biersteker and C. Weber (eds) *State Sovereignty as Social Construct*. Cambridge :Cambridge University Press.

Nye, J. and Owens, W. (1996) The information edge. *Foreign Affairs*, 75: 20-36.

Ó Tuathail, G. (1995) Theorizing history, gender and world order amidst crises of global governance. *Progress in Human Geography*, 19: 260-272.

Ó Tuathail, G. (1996) *Critical Geopolitics*. Minneapolis: University of Minnesota Press and London: Routledge. 2章のみ；トール,G.著 成瀬厚訳 (1999) 『批判地政学』：変容する空間 現代思想 1999.vol.27-13 青土社.

Ó Tuathail, G. (1997a) At the end of geopolitics? Reflection on a plural problematic at the century's end. *Alternatives*, 22: 35-56. トール,G.著, 篠儀直子訳 (1998) 『ジオポリティクスの終焉？－世紀末の複数的プロブレマティックに関する諸考察－』:「メディア都市の地政学」 10+1 no.13 INAX出版.

Ó Tuathail, G. (1997b) Emerging markets and other simulations: Mexico, Chiapas and the geo-financial panopticon. *Ecumune*, 4: 300-317.

Ó Tuathail, G. and Luke, T. (1994) Present at the (dis)integration: Deterritorialization and reterritorialization in the new wor(l)d order. *Annals of the Association of American Geographers*, 84: 381-398.

Poster, M. (1995) *The Second Media Age*. Cambridge: Polity.

Reich, R. (1991) *The Work of Nation*. New York: Knopf.

Robertson, R. (1995) Glocalization: Time-space and homogeneity-heterogeneity, in M. Featherstone, S. Lash and R. Robertson (eds) *Global Modernities*. London: Sage, 25-44.

Rochlin, G. (1997) *Trapped in the Net: The Unanticipated Consequences of Computerization*. Princeton NJ: Princeton, University Press.

Rodrik, D. (1997a) *Has Globalization Gone Too Far?* Washington, DC: Institute for International Economics.

Rodrik, D. (1997d) Sense and nonsense in the globalization debate. *Foreign Policy*, 107: 19-37.

Rosencrance, R. (1996) The rise of the virtual state. *Foreign Affairs*, 75: 45-61.

Shapiro, M. and Alker, H. (eds) (1996) *Challenging Boundaries: Global Flows, Territorial Identities*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

Shenk, D. (1997) *Data Smog: Surviving the Information Glut*. New York: HarperCollins. シェンク,D.著, 倉骨彰訳 (1998) 『ハイテク過食症－インターネット・エイジの奇妙な生態－』 早川書房.

Sopko, J. (1996) The changing proliferation threat. *Foreign Policy*, 105: 3-20.

Tapscott, D. (1996) *The Digital Economy: Promise and Peril in the Age of Networked Intelligence*. New York: McGraw Hill. タプスコット,D.著, 野村総合研究所訳 (1996) 『デジタル・エコノミー－ネットワーク化された新しい経済の幕開け－』 野村総合研究所情報リソース部.

Taylor, P. (1996) *The Way the Modern World Works*. New York: Wiley.

Virilio, P. and Lotringer, S. (1983) *Pure War*. New York: Semiotext(e). ヴィリリオ,P.・ロトランジェ,S.著 細川周平訳 (1987) 『純粋戦争』 ユー・ピー・ユー.

Virilio, P. (1995) *The Art of the Motor*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

Virilio, P. (1997) *Open Sky*. London: Verso.

Walker, R. B. J. (1993) *Inside/Outside*. Cambridge: Cambridge University Press.

Weber, C. (1995) *Simulating Sovereignty*. Cambridge: Cambridge University Press.

Yergin, D. (1991) *The Prize*. New York: Simon & Schuster. ヤーギン,D.著, 日高義樹・持田直武共著 (1991) 『石油の世紀－支配者たちの興亡－ (上・下)』 日本放送出版協会.